移住者日記

No.6

一般社団法人　とみおかプラス
移住専門員　竹原　愛梨　様

私は島根県松江市出身です。実家は島根原子力発電所の近くにあり、小学校で原子力発電のことを勉強したり、原子力防災訓練に参加したり、原子力発電を身近に感じて育ちました。福島第一原子力発電所事故が起きたのは、小学校6年生の時でした。子どもながらに、今まで学んできた原子力発電と福島県で起きていることにギャップを感じ、どうして事故は起きてしまったのだろうと疑問と興味が湧きました。

時が流れて、進学した地元の工業高等専門学校では電気について学び、プライベートではエネルギーについて考える活動に参加していました。2017 年に活動の一環として、福島第一原子力発電所の視察があり、避難指示が解除されたばかりの富岡町を訪れました。その時は福島県で働くことは考えていませんでしたが、原子力に関わる仕事がしたいと考え、卒業後は専攻科に進みました。2019 年、先生に薦められ、廃炉事業を行う企業へのインターンシップのために大熊町に滞在することになりました。大熊町は私の地元のように豊かな自然の中にあり、新しい一歩を踏み出したばかりの町はとても魅力的に感じました。大熊町に心惹かれ、この町がどんどん発展していく過程を見てみたいと思うようになり、大熊町に移住して廃炉事業に携わることを決めました。人々が穏やかに暮らす町には安心感があり、放射線について不安に思うことはありませんでした。空間線量率等の情報は移住後に知るようになり、安全であることを再確認しています。

移住当初から、町を知りたい、楽しみたいと思い、就職先で出会った彼（現在の夫）と一緒に双葉郡で行われるイベントに積極的に足を運んでいます。その中で、町を盛り上げたいという活力のある若者たちとの出会いがあり、私も直接的に町に関われる仕事がしたいと考えるようになりました。結婚をきっかけに、二人で暮らすための条件に合う物件があったことで富岡町に引っ越し、ご縁があってとみおかプラスで移住専門員として働くことになりました。現在は、町の暮らしに関する情報収集や移住相談への対応、移住に関するイベントへの対応を主な業務としています。最近は、今の富岡町を好きになってもらうだけでなく、震災のずっとずっと前から続く伝統、文化等、歴史からも富岡町を見つめてもらうことで、より愛着を持ってもらえるのではないかと考えています。古きを知り、今を愛す！という感じです。私自身が移住者だからこそ寄り添える気持ちと町民だからこそ伝えられる歴史を強みに、定住に繋がるような案内ができればと思っています。

環境に適応できる性格もあってか、生活に不便を感じたことはありません。昼間は元気に働いて、夜は静かな時間を満喫しています。自己啓発の勉強をしたり、本を読んだり、ドライブをしたり、幸せとは何かを考えたり…、のんびりとした生活を送っています。富岡町には、私の大好きな某ハンバーガーショップはありませんが、どうやら福島県には店舗がないようなので仙台に出かけた時の楽しみが増えたということで、それも含めて充実した毎日です。